

# 保育システムのダイナミクスと保育者の方略

——幼児の状態と保育者の方略の関係——

高 濱 裕 子

Dynamics of Teacher-Child System and Teacher's Strategy

Yuko TAKAHAMA

## 問 題

### 保育システムとその変化

幼稚園や保育所の保育場面には、保育者と幼児によって構成されるシステムが存在する。高濱（2001）は、保育者が子どもの変化を察知しながら、その都度副目標とのズレを調整してより大きな目標をめざす制御のプロセスを記述した。さらに、保育者が2つの方略を用いて幼児の発達的变化や個人差に対処すること、これらの認知的道具を使って保育を組織化することを明らかにした。しかし、この研究には変化の記述面の課題が残った。保育者の方略が幼児側の変化によって変わるとしても、双方の変化がどのように進行するか、双方の変化がどのように影響を与えあうかは不明のままであった。

ここで参考になるのが、システムの動的な性質を表すトランザクションの概念である。トランザクションは、小さな要素が互いに連鎖反応的にあるべきごとの意味を変化させたり、新たな意味を作り出しながら全体としての変化を引き起こすような性質をもつ（氏家、1996）。この概念を用いて、母子システムや家族システムに出現した変化が次々と違った変化を生み出していく様相が記述されている（Chess, & Thomas, 1981；氏家、1996）。

保育システムにおいても、保育者の方略と幼児の状態とはトランザクトしていると予想される。とはいえ、これらを解明するには方法論上の工夫が必要になる。マクロな変化とともにマイクロな変化をとらえることが必要であり、そのためにはできるだけ短い時間間隔で繰り返し測定をおこなうことが不可欠である。さらに複数の保育者と幼児を対象にし、システムに出現する変化のパターンを比較することも必要になる。

### 保育システムと保育者の方略

先行研究の問題点を改善するために、本研究では抑制的な行動傾向をもつ幼児を対象にする。保育者はこのような特徴をもつ子どもへの対応を難しいと感じる。内気な子どもや自己抑制的な子どもは保育者に接近しないため、子どもの意図を把握するのが困難であり、保育者はその関係構築に見通しをもてない（杉村・桐山、1991；高濱、2001）からなので

ある。

保育者側から幼児との関係をみると、幼児自ら援助を求める場合には、援助のタイミングとその内容は幼児の行動や反応によって判断できる。一方上述のように幼児が接近せず、必要な援助を求めない場合、保育者自ら援助の必要性和その内容を判断しなければならない。したがって、いかに的確に幼児の状態を把握するかが問われる。このように幼児の特徴によって、保育者が関与の必要性を判断する状況は異なると考えられる。

そもそも、保育者はどのような状況で関与の必要性を認識するのだろうか。子どもの遊びが自立的になるにつれて、保育者は関与を控えて状況を見守るようになる（高濱，1993）といわれる。そうだとすれば遊びを自力で進行させることが困難な状況、つまり遊んでいない状況やうまく遊びが進行しない状況で関与することになる。自己抑制的な子どもは、遊びへの参加という点では保育者の評価が低くなる傾向が見出されている（柏木，1988）。彼らは自分から遊び出さず、他児を傍観することがあるため、保育者に援助の必要性を認識させるのであろう。

自己抑制タイプの幼児を対象にすることで、保育者の方略と幼児の状態の変化が引き伸ばされた形で観察できるだろう。つまりトランザクションの変化をより明確にとらえることができると考えられる。

### 保育者の方略についての予想

保育者の用いる方略として“介入”と“意図の確認”があげられている。介入が保育者の対応に一定の秩序を与えるのに対し、意図の確認はそれを制御している（高濱，2001）。

幼児に方略が受容された場合や、幼児の状態が改善された場合を考えてみよう。これを保育者側からみると、幼児との関係に確信をもてることになる。一方幼児側からみると、保育者が当てになるという感覚をもつことになる。とはいえ既有情報の少ない入園や進級の時期には、保育者は幼児に関する情報を意識的に収集しなければならない。幼児がどのような状態にあるのか、その状態にはどのような方略が有効なのかを把握する必要がある。一定の情報収集と状態の判断にもとづいて、保育者は次の目標を設定し、新たな方略を決定すると考えられる。

そこで幼児の状態を大ざっぱに分類して、保育者の方略を考えてみよう。それらは何もしていない状態、ひとりで遊んでいる状態、仲間と遊んでいる状態の3つであり、それぞれ順に状態A、状態B、状態Cと呼ぶことにする。

状態Aが優勢な場合、保育者は幼児が動き出すまで放っておくという方略はまずとらない。幼児が遊びに取り組むようになることを願い、その目標に沿って働きかけるからである（高濱，1993；2001）。したがって、状態Aを減らして状態Bを増やすことを目標にするだろう。やりたい遊びがあるのか、どのような遊びを好むのかを探るために、例えば遊びに誘う、もの（遊具など）を提示するなどの方略を用いると予想される。

状態Bが優勢な場合の目標は2通り考えられる。ひとつは状態Bの維持、つまり遊びを続行させることである。遊びを続行するには大人の役割が不可欠であり（Bruner，1983）、そのための方略は介入であろう。2つ目は状態Bを減らして状態Cを増やす場合である。ひとり遊びや平行遊びが進行している場合には、互いの意図が示されることで仲間との関係が成立しやすくなる（Bakeman, & Brownlee, 1980）。したがって保育者は複数の幼児の

Table 1 保育者の方略についての予想

時期 1 幼児の 初期状態 保育者 の方略 介 入	優 勢 な 幼 児 の 状 態	時期 2			
		保 育 者	目 標	方 略	
				介 入	意 図
⇒	A		A < B レベルアップ	○	×
	B		B 遊びの続行	○	×
			B < C レベルアップ	×	○
	A・B		A < B レベルアップ	○	×
			B 遊びの続行	○	×

注 1. 状態 A は何もしていない状態、状態 B はひとり遊び、状態 C は仲間遊びを示す。

注 2. ○は目標に対して有効と予想される方略、×は有効でないと予想される方略を示す。

仲介をし、幼児同士が関心をもつように働きかける必要がある。用いられる方略は、幼児の意図を引き出すことだと考えられる。

状態 A と状態 B が優勢な場合にも、目標は 2 通り考えられる。ひとつ目は状態 A を減らして状態 B を増やすことであり、2 つ目は状態 B の維持である。そのための方略は上述した通りである。以上の予想をまとめて Table 1 に示した。

幼児の意図を把握可能になれば、保育者は介入をより多く使うのではないかとはいえ発達の変化によって幼児の意図は複雑になるから、意図から介入へという単純な方略の切り換えでは対処できない。したがって保育者が目標を設定したとしても、幼児の受入れや状態の変化によって、方略の変化する方向は一義的には決まらないことになる。保育者はその都度幼児の状態の変化を考慮しながら関与することになるから、方略の変化する道筋は多様になると予想される。それらを解明しようとするれば、多くのケースはあつかえない。少数ケースを対象にして、変化のパターンの共通性や特異性を探ることが必要になる。

## 本論の目的

保育者の方略に焦点を当てて相互交渉を検討する際、2 つの疑問があげられる。まず、保育者の方略の変化と幼児の状態の変化にはどのような関係があるのだろうか。これまでの議論にもとづけば、保育者の方略と幼児の状態とはトランザクトしているだろう。つまりこれら 2 つの変数とその都度影響しあいながら変化すると予想される。したがって、それぞれの変数が変化する時期を特定する必要がある。次に、保育者の方略はどのような方向へ変化するのだろうか。保育者の方略と幼児の状態がトランザクトしているとすれば、出発点は同じでも、保育者の方略の変化する方向は多様になると予想される。

以上をふまえ、本論では次の 3 点を検討することが目的である。第一に、保育者の方略の変化と幼児の状態の変化が出現する時期を明らかにする。第二に、保育者の方略と遊びにおける幼児の状態との関係を検討する。そして第三に、3 ケースの発達の変化の共通性を探り、モデル化を試みる。

## 方 法

**対 象：**4歳児クラスの担任保育者<sup>1)</sup>とそれぞれの保育者が担任する幼児のペア3組である。各ペアは、A市内にある社会福祉法人立の保育所2園に所属する。それぞれの保育者に、クラスの中で自己抑制的だと感じる幼児<sup>2)</sup>を対象児に抽出してもらった。保育者と幼児のペアの属性は、Table 2の通りである。

各ペアの観察は、セッション1からセッション3までおこなわれた。各セッションの観察は、1週に2回の頻度で2ヵ月間ずつ継続的におこなわれた。ただし対象児の欠席など

Table 2 対象の属性

事 例	対象児（月齢・入園時期）	対象保育者（経験年数）	所属園	観察時期
事例1	ようた（男児51ヵ月・51ヵ月）	女性保育者（15年）	A 保育園	1998年～1999年
事例2	さきこ（女児48ヵ月・12ヵ月）	女性保育者（10年）	A 保育園	1999年～2000年
事例3	みかこ（女児57ヵ月・45ヵ月）	女性保育者（30年）	B 保育園	2000年～2001年

注. 対象児の名前はすべて仮名である。ようたは11ヵ月で入園したが、転居により転入園した。

Table 3 保育者の方略・幼児の状態・方略の受入れについての分析測定

保育者の方略	
介入のみ	幼児の意図の実現や意図の制御など、直接的な方向づけをする (例：ブランコを勢いよくこいでいる幼児に「スピード出しすぎ！」という；ブランコのそばにいる幼児に「『ブランコ貸して』ってゆってごらん」という)
意図のみ	幼児や仲間あるいは幼児と仲間が、何をしたいのかを確認したり引き出したりする (例：グローブジャングルのそばで様子を見ている幼児に「乗る？ どうする？」と聞く；幼児がブロックで構成したロボットを手にして「どれ、どうやるのかな？」といいながら動かす)
意図+介入	幼児の意図を確認したうえで、何らかの方向づけをする (例：ぬいぐるみを2つ持っていてころんだ幼児に、保育者は「2つもってるから、ころんだ時に手をつけないの。どっちかひとつにしよう」というと、幼児は「いやだ」という。保育者は「2つがいいの？」と聞くと、幼児はうなずく。保育者は「わかった」といって、一方のぬいぐるみを幼児のズボンにはさんでやる)
遊びにおける幼児の状態	
状態A	何もしていない行動（実質的な活動がみられない場合）；傍観者の行動（自分では何もしていないが、他児の活動を見ている場合）；保育者と一緒にいるなど
状態B	ひとり遊びあるいはひとりの活動；平行遊び
状態C	他児との社会的相互交渉（集団遊び；役割遊び；対話；他児に話しかける；他児から話しかけられる；いざこざ；自己主張など）
保育者の方略の受入れ	
受 容	幼児が保育者の発話内容にそった行動をとった場合；幼児が保育者の準備した材料や用具などを使った場合；保育者が提示したいいくつかの選択肢から、幼児がアイディアを選択した場合；保育者の働きかけに対して、幼児がニコッと笑う、喜ぶなどのポジティブな表情を表出させた場合
拒 否	幼児が自ら意図を表明した場合；保育者の援助に対して、幼児が「違う」「それはいい」「いやだ」などと明確に拒否した場合；保育者の発話に対して拒否的な表情を表出させたり、無視した場合；幼児の状態に何ら変化が認められない場合

の理由により、各セッションの平均観察回数は12回（分布10-14，SD1.7）であった。観察時間は対象児の登園から自由遊び終了までとしたが、対象児の登園時刻には差があったので、平均観察時間はようたが62分、さきこが104分、みかこが64分であった。観察にはビデオカメラとフィールドノーツを併用した。面接は観察日の夕方におこなわれ、自由遊び場面における保育者の働きかけの内容や対象児の状態のとりえ方などについての情報が収集された。面接の所要時間は平均40分であった。

**分 析：**幼児がどのような状態の時に、保育者がどう関与したかという観点から分析がおこなわれた。それぞれのセッションの言語記録から、保育者と幼児の相互交渉が出現したエピソードについて、幼児変数（遊びにおける幼児の状態）と保育者変数（保育者の方略）がコード化された。幼児変数はParten & Newman（1943）を参考にして、3カテゴリが設定された。保育者変数は、高濱（2001）にもとづいた3カテゴリが設定された（Table 3参照）。さらに保育者の方略が受入れられたかどうかについて、Table 3の分類基準にしたがって判定した。

1日分の言語記録から、保育者と幼児の相互交渉が出現したエピソードをそのまとまりに留意して抽出し、生起した順番に通し番号をつけた。次にそのエピソード番号を、幼児変数と保育者変数が対応するように作成された3×3マトリックスのセルの枠内に記入していった。なお、保育者の方略の判別には面接でえられた情報を補助的に用いた。

1セッションごとに、9つのセルに記入されたエピソード数を集計し、セルごとの出現率を算出した。これらをマクロな変化とした。次に、各セッションを3つの時期（序盤－1，中盤－2，終盤－3）にわけた。それぞれの時期ごとに9つのセルに記入されたエピソード数を集計し、セルごとの出現率を算出した。これらをマイクロな変化とした。

保育者の方略、遊びにおける幼児の状態、保育者の方略の受入れについての分類は、2名の独立した評定者によっておこなわれた。評定者間の一致率（一致数／〔一致数＋不一致数〕）は、保育者の方略に0.85、幼児の状態に0.81、方略の受入れに0.90がえられた。なお分類の不一致は、協議の上で調整を図った。

## 結果と考察

### 分析Ⅰ 変化の起きた時期

まず保育者の方略と幼児の状態をマクロなレベルで検討した。全ての事例で保育者の方略に変化が起きていたが、その時期は事例により異なった。カイ二乗検定をおこなった結果、事例1はセッション2で( $\chi^2(4) = 26.09, p < .01$ )、事例2はセッション3で( $\chi^2(4) = 10.50, p < .01$ )、事例3はセッション3で( $\chi^2(4) = 18.93, p < .01$ )変化していた。

また全ての幼児の状態に変化が起きていたが、その時期は事例により異なった。カイ二乗検定をおこなった結果、ようた（事例1）はセッション2で( $\chi^2(4) = 17.47, p < .01$ )、さきこ（事例2）はセッション3で( $\chi^2(4) = 18.93, p < .01$ )、みかこ（事例3）はセッション3で( $\chi^2(4) = 18.93, p < .01$ )変化していた。

変化の起きた時期は事例により異なるが、どの事例においても保育者と幼児は同じ時期に変化していた。保育者と幼児の変化には何らかの対応関係があると予想される。

## 分析Ⅱ 状態 A における方略の受入れ

次に予想としてあげた何もしていない状態（状態 A）の受入れ率を検討する。第 1 セッション全体を通しての平均受入れ率は、ようたが 47.1%，さきこが 48.3%，みかこが 53.3%であった。ほとんど差がないので、次にセッション 1 内での変動を検討する。

Table 4 に状態 A における方略の受入れ率を示した。ようたの受入れ率は 41.2%，56.3%と上昇し、セッション 1-3 では 0%になった。内訳を見ると、1-1、1-2 とともに介入をより多く受入れている。1-3 では、使用された唯一の意図が受入れられなかった。1-3 の状況は方略を全く受入れないことではなく、使う必要がなかったこと、すなわち状態 A の消失を示しているのではないか。次に、さきこは 38.5%，50.0%，62.5%と次第に受入れ率が上昇する。内訳をみると、1-1 では意図が介入を上回るが、1-2 では同じ割合になり、1-3 では介入が意図より多く受入れられている。最後に、みかこは 50.0%，54.5%，55.0%と受入れ率は一定の割合で推移する。内訳をみると、1-1 では意図と介入がほぼ同程度、1-2 ではやや介入が上回り、1-3 では意図が介入より多く受入れられている。

セッション 1 における方略の受入れは、事例によって変化のパターンが異なる。ようたとさきこでは平均受入れ率の上昇がみられるが、みかこでは一定である。また方略を意図と介入に限定すれば、ようた（事例 1）は意図は受入れず、介入を受入れる割合が上昇していく。さきこ（事例 2）は意図と介入を同程度受入れていたが、次第に介入をより多く受入れるようになる。みかこ（事例 3）は両方を受入れているが、意図がより多い。平均受入れ率の上昇は、介入の受入れ率が増えていくことと関係するようだ。

状態 A とは実質的な活動がみられない状態であるから、保育者は幼児が活動を始めるように働きかけるだろう。つまり状態 B へのレベルアップをめざすと考えられ、用いられる方略は介入であろう。事例 1 と事例 2 ではこの予測が裏づけられた。しかし事例 3 の保育者ように意図をより多く用いているとすれば、そこには異なる判断があるのかもしれない。そこでさらにマイクロなレベルの検討をおこなう。

Table 4 セッション 1 の状態 A における方略の受入れ率（%）

	セッション 1-1		セッション 1-2		セッション 1-3	
	平均	方略内訳	平均	方略内訳	平均	方略内訳
ようた	41.2	( 0, 11.8, 29.4)	56.3	( 0, 12.5, 43.8)	0	( 0, 0, 0)
さきこ	38.5	(27.6, 0, 17.2)	50.0	(25.0, 0, 25.0)	62.5	(25.0, 0, 37.5)
みかこ	50.0	(20.7, 3.4, 17.2)	54.5	(18.2, 9.1, 27.3)	55.0	(35.0, 0, 20.0)

注. 方略の内訳は、意図、意図+介入、介入の順に示した。

## 分析Ⅲ 事例ごとの分析

マイクロレベルの変化を、事例ごとに、保育者の方略と幼児の状態、保育者の認識と方略の順に記述する。

**事例 1 保育者の方略とようたの状態** 保育者の方略を Figure 1 に、ようたの状態を Figure 2 に示した。保育者はセッション 1 全体を通して、意図と介入を同程度用いている。セッション 2 では様相が変わり、意図を多く用いている。とりわけ 2-1 での変化は著しく、方略を切り換えたのではないかと推測される変化である。セッション 3 では意図と介入を同

## 保育システムのダイナミクスと保育者の方略

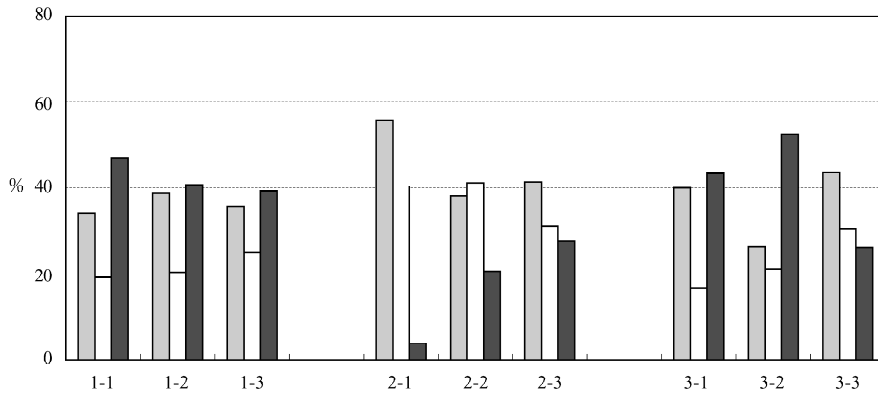


Figure 1 保育者の方略 (ようた)

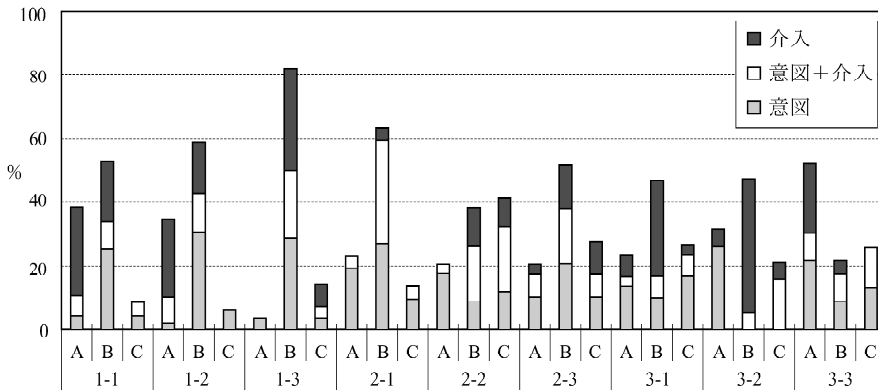


Figure 2 ようたの状態

程度用いている。

一方、ようたの初期状態（セッション1-1）は状態 A と状態 B が優勢である。1-2では同じ傾向が続くが、1-3で大きな変化が出現している。すなわち状態 B が8割を超える突出した状態になった。2-1では状態 B の優勢さが続いている。さらに2-2において顕著な変化が出現し、状態 B と状態 C が優勢になった。ここでの状態 B の減少は、状態 C の増加に関連がある。これ以降若干の変動はあるが、状態 C は2割から3割台を保っている。セッション3では状態間の差が小さくなる。状態 C が一定の割合を維持するのに対し、状態 A と状態 B との間では増減がみられる。3-1と3-2では状態 B が優勢だが、3-3では状態 A が優勢になる。

保育者の方略はセッション2-1で顕著に変化した。この変化は1-3におけるようたの状態の変化を受けたものではないだろうか。そして、方略の変化が2-2以降のようたの変化を引き起こした可能性も推測される。そこで次に、保育者の認識と方略を検討する。

**事例1 保育者の認識と方略** Figure 2でようたの初期状態（1-1）をみると、保育者の方

略は状態 A と状態 B とでは異なることがわかる。すなわち状態 A には介入を、状態 B には意図を多用している。保育者は「最初は私がしかけていった方が子どもがのりやすいのかなと思ってやっている。(子どもが) のってこない、自分だけ浮きあがってしまうが」と話している。これは、保育者が状態 A を減らして状態 B を増やそうと試みていることを裏づける発話であろう。

セッション1-2と1-3の方略は一貫しているが、保育者はようたの変化をとらえていた。「まわりの子に目を向けるようになり、誰かのまねをして動き始める」ようになり、「ブランコに乗りたそうな顔をしたので、(私が) けしかけたらのってきた。」また「ブロック遊びには長い時間集中していた」と取り組みの変化もとらえた。さらに1-3では「保育園に慣れてきたら、またいまいちわからない。ようたの含み笑いはどういう意味か」と変化によってわかりにくくなった点をあげ、「随分かわってきたが、他の子との会話がもう少しあればいいのかな」と変化をおさえて目標を微調整している。

保育者は担任当初の状況を次のように語った。「最初のうち(ようたは) 遊んでいなかったの、『これで遊ぶと楽しいよ』と思えるように働きかけた。」1-2になると、「ようたの方から『先生』というようになったので、私のいうことも聞き入れてもらえるかなと思っている。遠慮がなくなったと思う」と話している。これらは、保育者が幼児の様子を探りながら特定の状況をとらえて関与していること、ようたとの間にラポールが形成されたと認識していることを示すと考えられる。

セッション2-1では保育者の方略が顕著に変化し、介入より意図を多用している。この変化は、他児との関係がようたの課題と認識した保育者の戦略であると考えられる。セッション2の開始直前、保育者は「(ようたは) 友だちの方に自分からいけないので、『まぜて』とか『貸して』とかいえるようになってほしい。友だちに頼むようなことがまだいけない」と話した。セッション2-1では、実際に子ども同士で遊びを進めていけるように関わっている。「子ども達だけで遊んでいたの、(私は) 抜けてみたが、長続きはしなかった」と語ったが、2-2では「ひとりでポツンといることがなくなり、友だちとの遊びを楽しんでいる」と変化を認識した。保育者の認識は、Figure 2のようたの状態の変化と一致する。しかし一方で「誘えばのるかなと思っても、『おれ、いい』と断ったり、何だかようたの興味がわからなくなった」と話している。2-3では「子ども同士の会話が始まったら、私は退いて、続くかどうか見ている。虫関係の話題は長続きするのかな」という。そして「まわり子どもたちがようたに関心を示すようになった」と仲間関係の変化を語った。

セッション2で保育者は、案外ようたが「感情の起伏の激しい子だ」と感じる。セッション1では「身体が拒否しても、顔が笑っているのだからわかりやすい」と話していたが、「月曜日や欠席が続いた後に調子が出ない。お盆明けの3～4日大暴れした。大暴れでくるか、元気にくるか、どちらかだ(2-1)」や「ふとん部屋で涙を流していたので訳を聞いたが、笑って答えなかった(2-2)」など、違った面を認識するようになる。そして「気分をコントロールできないのが課題かな」と話している。

したがってセッション2-1で出現した保育者の方略の変化は、セッション1-3のようたの状態の変化を受けたものである可能性が高い。ようたが遊べるようになったことを受けて、保育者は次の目標を仲間との関係づくりにおいたのである。関係づくりのためには相手の存在に気づかせ、関心を持たせることが必要であろう。そのためには双方の意図を引き出



して提示することが必要であり、方略としては意図を用いるだろう。ただし、保育者の発話からはようたの状態をとらえかねている様子もうかがえる。そのような状況では幼児の状態を探る必要があるから、恐らく介入は使いにくい。以上から保育者は、意図を多用する方向へと方略を切り換えたと考えられる。

セッション3では介入を使う割合が増えている。保育者は「自分のことをどんどん出すようになったし、話すようになった(3-3)」とようたの変化を認識する。ようたは「目立つことが嫌いではない。笑いをとるセンスがあるようだ(3-1)」し、「欠席した後、受けをねらって突拍子もないことをする」という。さらにようたの状態を把握できるようになったことを示す発話も聞かれた。それは「ぐずぐずする訳があり、それがわかるようになった(3-2)」である。そして「気分を持ち上げるのに時間がかかる子だ。のっちゃえば何でも(3-3)」と確信をもって語っている。子どもの状態を把握できるようになれば、状態を探ったり試行する必要はなく、状態の変化をめざして介入を使うことができる。それがセッション3における介入の多用として示されていると考えられる。

**事例2 保育者の方略とさきこの状態** 保育者の方略を Figure 3 に、さきこの状態を Figure 4 に示した。保育者はセッション1では意図をより多く用いる。セッション1-3と2-1では方略が変化し、介入をより多く用いるようになる。2-2と2-3では、意図と介入を同程度用いている。そして、セッション3では介入をより多く使っている。

一方、さきこの初期状態(セッション1-1)は状態Aと状態Bが優勢である。1-2では状態Cが増加し、1-3では3つの状態の割合がほぼ同程度になる。セッション2-1では状態Aが減少し、状態Bと状態Cが優勢になり、2-2でもこの傾向が続く。しかし2-3では様相が変わり、状態Aが5割近くまで増加している。状態Cは一定の水準を保っているから、この変化は状態Bの減少によるものであろう。セッション3では2-3で出現した状態Aと状態Cの優勢さが保持され、状態Bはさらに減少する。3-2では状態Bが完全に消失する。3-3では状態Bが約2割まで増加し、その分状態Cが減少した。

保育者の方略はセッション3で顕著に変化し、介入をより多用するようになった。この変化の説明としては、セッション3-1におけるさきこの状態の変化と連動している可能性と、セッション2-3におけるさきこの変化を受けたものである可能性があげられる。そこで次に、保育者の認識と方略を検討する。

**事例2 保育者の認識と方略** Figure 4でさきこの初期状態(セッション1-1)をみると、保育者は状態Cで介入を使用する割合が多いものの、状態Aと状態Bには意図を多用している。この傾向は1-2でも同様である。保育者は当初「『おはよう』と声をかけても、返事が返ってこない。声をかけると(さきこが)緊張して表情がこわばる」と話した。1-2ではさきこから「初めて『おはよう』と返ってきた。」とはいえ「さきこから挨拶が返ってきてもうれしかったが、私の方がうろたえた」という。

保育者は担任当初の状況を次のように語った。「こちらから声をかけると、さきこは硬直したり(やっていることを)やめたりするので、おそろおそろ声をかけている。どうもさきこには声をかけにくい(1-1)。」また「どうしても他の子と同じように接することができない。私が意識してしまい、ことばがでてこない(1-2)」という。保育者にとって、さきこは声をかけにくく状態をとらえ難い幼児なのである。そうだとすれば探りながら状況の

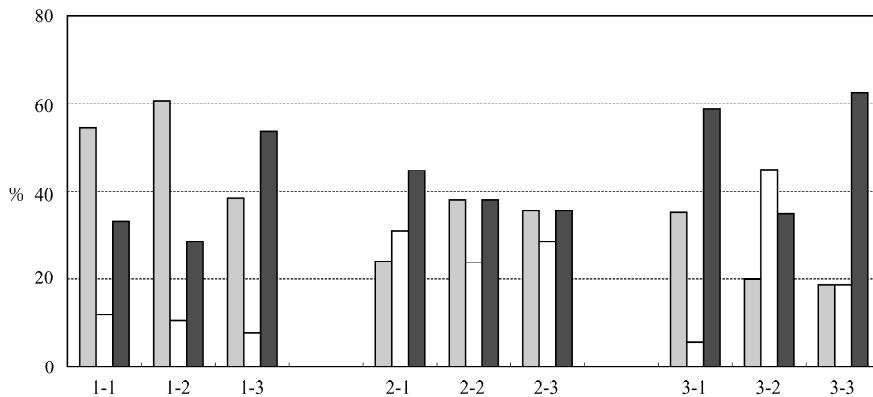


Figure 3 保育者の方略（さきこ）

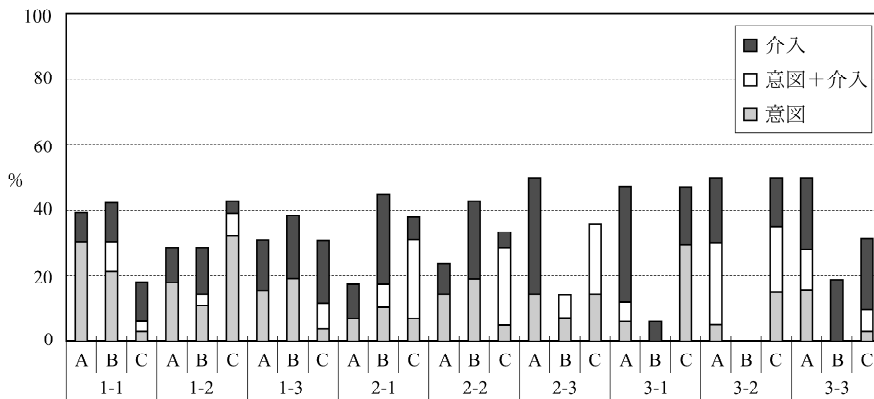


Figure 4 さきこの状態

把握に努めることになり、そのために意図を多用していると考えられる。

セッション1-3では保育者の認識が変化し、「(さきこが) 自分から話しかけるようになったので、安心してつきあえるようになってきた」という。しかしさきこの話す内容は他児のことで、「相変わらず自分の(困った)ことはいわない。」また「友だちに流される。だから仲良くいられるのかなとは思うが、自分の主張はもっと出してほしい。顔は怒っているのにことばに出ない」と課題も認識する。セッション2-1では、さきこが「友だちと一緒に悪いことをする」場面もみられるようになり、保育者自身「(さきこに) 声をかける時、前ほど意識しなくなった」と語った。状態を探る必要度が減り、介入を使えるようになったのだと考えられる。

セッション2-2と2-3では意図と介入を同程度使っているが、Figure 4のさきこの状態と照合すると、次のようなことがわかる。保育者は状態Cでは意図+介入を多用し、状態Aと状態Bでは介入を多く使っている。状態Cについては、「さきこに『いいたいことをいい

なさい』といっても萎縮するので、まわりの子どもを調整していると思う（2-3）」という。またさきこに対しては「スキンシップを心がけている。今はやっても大丈夫かな（2-3）」と話した。さきこ自身とさきこを含む仲間に対してでは、方略を使い分けている。保育者の認識の枠組みが変化したと思われる言及もあった。「今はさきこが好きになった。反応は少ないが変わってきた。今は私も安心してやれる」というのである。

セッション3では方略が変化し、介入を多用するようになる。それは「さきことY美の関係が変わってきたようだ（3-1）」という認知にもとづくと考えられる。2-1では「Y美への不満はあるが、それをいえない」ので、「Y美が欠席すると、A子と和気あいあいですごせる」という。3-1になって、さきこはY美のグループから離脱した。その時の状況を「さきこがブラブラしていたので、声をかけたら（私の方に）よってきた」と説明している。自ら嫌な状況を回避することやY美たちから離脱することは、さきこの大きな変化であろう。さきこへの関与の緊急度が高いと判断し、保育者は介入を多用したと考えられる。

さきこの状態はセッション3-3で変化したが、これは介入を多用した効果ではないだろうか。ここでは再度状態Bが出現した。3-2では状態Bが消失したため、保育者はより一層の介入が必要と考えたのであろう。その結果焦りも語られるようになる。「さきこが遊べていないことが気になるが、働きかけるまではいかない。（私が）何かあてがっても長続きしないだろう」という。そして「さきこと一生懸命しゃべらないと、もう3月になってしまう（3-2）。」3-3ではさきこに関わりたいが「よってくる子どもに、つい手をかけてしまっている。何とかこちらからと思うが難しい」と語った。

**事例3 保育者の方略とみかこの状態** 保育者の方略をFigure 5に、みかこの状態をFigure 6に示した。保育者はセッション1-1では意図を多用し、その後意図と介入を同程度用いている。この傾向はセッション3-1までほぼ一貫しているが、3-2において方略は顕著に変化した。すなわち介入をより多く使うようになったのである。

一方、みかこの初期状態（セッション1-1）は状態Aと状態Bが優勢であり、状態Cは全く出現しない。1-2で状態Cが出現するが、1-3では減少してしまう。1-2で変化するかにみえたが、初期状態にもどったようである。セッション2-1になると、状態Cが2割を越える水準で出現する。そして2-2では大きな変化が出現し、状態Bが6割をこえる突出した状態になる。2-3では状態Bの優勢さが続くが、3つの状態差は小さくなる。セッション3-1では再び状態Bが優勢になり、2-2と極めてよく似た様相を示している。3-2になると状態Bと状態Cが優勢になり、3-3でも同様の傾向が続いている。

保育者の方略はセッション3-2で変化したが、この変化の説明としては2つの可能性があげられる。ひとつはセッション3-1におけるみかこの状態の変化を受けたものである可能性であり、もうひとつは3-2のみかこの状態の変化と連動している可能性である。そこで次に、保育者の方略と認識を検討する。

**事例3 保育者の認識と方略** Figure 6でみかこの初期状態（セッション1-1）をみると、保育者は状態Aにも状態Bにも意図を多用し、状態による方略の使い分けは見られない。保育者は「身の回りのことはきちんとやれる子だ。私の話をよく聞いているし、実際やれる」とみかこをとらえている。またみかこが「昨年の担任から離れて、私の方に目を向けるようになってきた」ことを認識し、「みかこから話しかけてくるのを待っている」という。つ

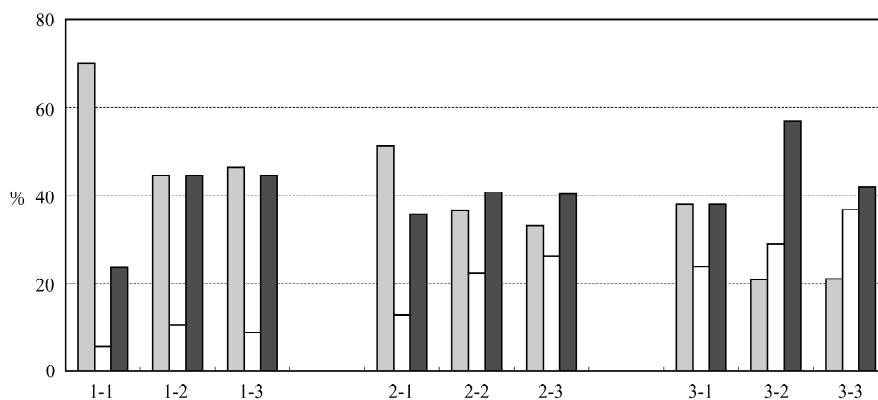


Figure 5 保育者の方略 (みかこ)

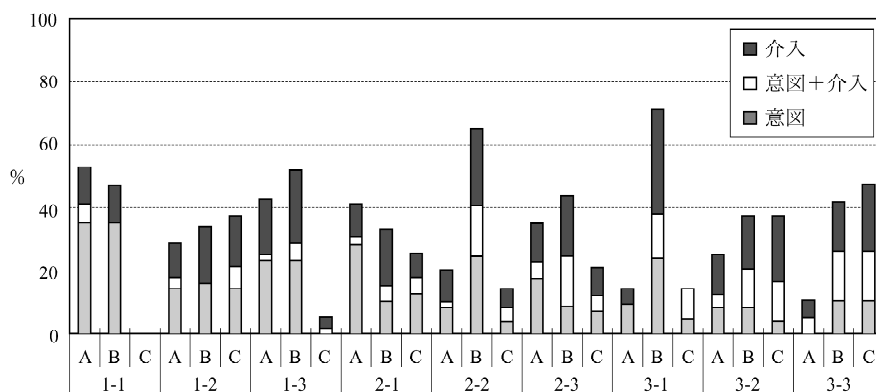


Figure 6 みかこの状態

まりみかこの状態を探っているのであり、その結果意図を多く用いていると考えられる。1-2では、「身体を動かして遊ぶようになり、遊びに満足するようになった」ことを認識した。とはいえ「みかこは、目で訴えれば私がわかってくれると思っているようだ」という。登園の時に「父親から離れずにあんなに泣いた」り、「ムッとした表情で（私に）すりよってくる」からだという。1-3では「よほど（調子の）よい時でないと、自分からはやっこない」ことがわかるようになる。また、みかこの行動を予測できるようになり「迷路遊びに誘った場面では、『やるんじゃないか』と思って声をかけたら、やっぱりきた」という。この時期にみかこは登り棒に興味を示し始め、保育者はみかこが自ら援助を求めるのを待っていた。『登り棒をやりたい』と（自分から）話してくれないかなと期待したが、こなかった」のである。

セッション1の終わり頃には、保育者は「みかこの限界をみてあげないと負担になるのかな」と語った。調子のよい時でないと保育者に近づかないだけでなく「よほど調子がよ

い時でないと友だちと関われない (1-3)」こともわかってきた。それまで保育者は、設定した目標とそれにフィットしないみかこの状態とのずれに焦点を当てていた。しかしフィットするのはかなり調子のよい時であり、それが極めて少ないことを認識する。保育者はいくつかの側面の変化を照合し、変化にもとづいて目標を修正したのではないか。

保育者は担任当初の状況を次のように語った。「担任になったばかりの時は『私の方を見てよ、私はあなたの担任よ』」と思っていた。なかなかみかこが動かない時は、『早くやって』『何かやって』と思う。関わったり、退いてみたり。私があきらめかけた時に、みかこがスーッと動いたりする」というのである。保育者が幼児との関係構築に腐心し、レベルアップに躍起となっていたことがわかる発話である。

セッション2全体を通して方略は一貫しているが、保育者の言及内容には変化がみられる。まず「みかこに何もなければ (私の) 誘いにのってくるかもしれないが、のってこないで (何か) あるのかもしれない (2-1)」という。子ども同士の関係についても「あまり『まぜて』といわせなくてもいいのかな」という。目標に到達するように関与してきたが、みかこは思うように変化しない。とはいえ、調子のよい時には違った行動をとることがわかるようになった。さらに「私に安心感をもっている。(みかこの) 関係ができてきたようだ」と認識する。そして2-2でのみかこの状態の変化は、保育者の認識とも一致した。「遊べるようになったので、大分わかるようになった」といい、同時に「みかこが自分から挨拶しにきたので、調子がいいんだ」と感じたり、「自分の不快な感情を出すようになった」ことや、「しばらく私といると、立ち直っていつの間にか離れている」ことにも気づく。そして「みかこが私に対して安心感やつながりをもっているのを感じる」と話す。

2-3では予測がつくようになり、「みかこが調子を崩しやすい場面がわかってきた」という。そして「調子が悪い時は『しょうがないな』」と思う。あしたになればなおるとか、いつまでも続くんじゃないと思う」と話している。「今のままでもいいのかな。嫌なことは嫌と出すし、やりたいことはやるし。自分を出していると思う。」これらから、子どもの変化をとらえた保育者が、考え方の枠組みを変化させたことがわかる。

セッション3-1ではみかこの状態が再度変化し、保育者も「自分の遊びをみつけて遊ぶようになった」と感じた。そして「私は二の次で、自分から友だちへいく」と、みかこの関心が仲間の方へ向けられたことも把握している。そして「今はちょっと (私が) 声をかければ、スーッと動く」と方略の効果も認識していた。

セッション3-2以降、保育者の方略は介入優勢へと変化した。保育者は「こういう子だとわかってきて、(私が関わるのは) ここまでだなと。みかこに対して『大丈夫だな』と確信がもてるようになった」と語った。保育者は試行錯誤的な関与から抜け出し、みかこの関係性や自分の方略に確信をもつようになったと考えられる。それが介入を多用する方略に示されているのであろう。そして「みかこへというより、相手を含めてどうするかを見ているところだ」と話し、みかこを仲間関係に位置づけている。みかこは「J子と大げんかになり、2人で泣いた。前はこんなことはなかった」と周囲が驚くような変化をみせた。

## 全体的考察

マクロレベルの分析から、保育者の方略と幼児の状態とは同じ時期に変化することがわ

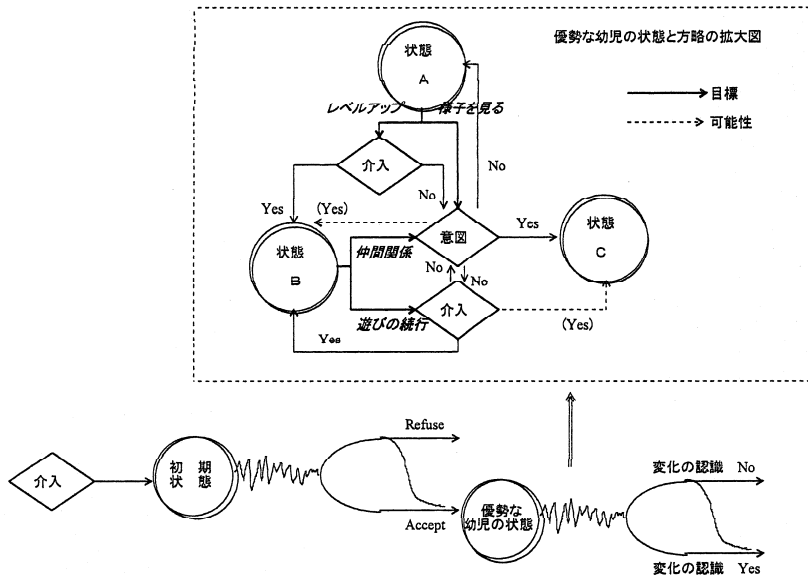


Figure 7 保育者の方略についてのプロセスモデル

かった。さらにマイクロレベルの分析を重ねると、両者の変化は共変関係にある可能性の高いことが明らかとなった。以上をふまえ、保育者の方略についてのプロセスモデルをFigure 7に示した。

当初、保育者は幼児の状態にかかわらず、何もしていない状態への関与を試みる。事例1では介入によってよい状態が変わり、保育者はよい状態を把握することができた。加えて、幼児との間にラポールが形成されたと認識することもできた。一方、事例2と事例3では介入を使えなかったり、介入を用いても効果がなかった。そのため保育者は組織的に関わることができず、幼児との関係に確信をもてなかった。つまり初期状態への関与の結果によって、システムは2つの異なった状態のどちらかに到達すると考えられる。

Accept という枝が選択された場合、保育者は幼児の状態に焦点化させた方略を使うように方向づけられる。一方 Refuse という枝が選択された場合は、保育者は新たな方略へと切り換えることが難しい。つまりもうひとつの枝は、変化しない幼児の状態にひきずられた形で進行する。やがて、幼児の発達の变化によってシステムの安定性がゆらぎ始める。すなわち状態Bが優勢になる方向へと変化していく。その変化を察知した保育者は、変化をさらに増幅させるように関与する。事例1では介入から意図へ、事例2と事例3では意図から介入へと方略を切り換えた。保育者は幼児の変化にあわせて新たな目標を設定し、その目標を志向する方略に切り換えたのである。

新たな目標は幼児のどの局面に注目するか、どの局面の増減を図るかという保育者の認識によって決まる。Figure 7には、優勢な幼児の状態と保育者の方略との関係も拡大して示した。状態Aに対する方略は、目標によって2つに枝分かれする。一方は状態Bへのレベルアップを図る場合であり、他方はとりあえず様子を見る場合である。保育者が用いる方略の有効性がYesとNoとで示されている。状態Bに対する方略も、目標によって2つに

枝分かれする。一方は状態 B の維持, すなわち遊びの続行である。他方は仲間関係, つまり状態 C へのレベルアップである。ただし介入によって状態 C へシフトする可能性もあるので, そのルートを波線で示した。

トランザクションのプロセスをダイナミックに記述することにより, 保育システムはある構造をもつ方向へと動くことがわかった。その契機は幼児の状態 B の相対位相差にあり, その変化にあわせた方略の切り換えによってさらに大きな変化が引き起こされていた。したがって保育者の方略を制御するのは状態 B の相対位相差であること, システムを制御するコントロールパラメータは確信度であることが示唆される。

**付記** 本研究にご協力くださった若松第一保育園と若松第二保育園のみなさまに, 深く感謝申し上げます。また分析や草稿にコメントをいただいた氏家達夫先生 (名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター教授) に, 心より感謝申し上げます。

## 注

- 1) 本研究の観察, データ収集, 結果の公表およびプライバシーの保護に関して, 事前に保育園長, 担任保育者, 筆者の三者間で確認作業をおこなった。またその内容を文書にまとめて交換した。
- 2) 保育者の判断の信頼性を確認するために, 観察開始直前に「教師による幼児の行動評定尺度」(柏木, 1988) を実施した。自己主張・実現尺度と自己抑制尺度の平均得点の差 (差異スコア) は, ようたが-4.96, さきこが-7.18, みかこが-4.75で, 3 名とも自己主張・実現面より自己抑制面が相対的に強いと解釈された。

## 文 献

- Bakeman, R., & Brownlee, J. R. (1980). The strategic use of parallel play: A sequential analysis. *Child Development*, 51, 873-878.
- Bruner, J. S. (1983). *Child's talk: Learning to use language*. Oxford: Oxford University Press.
- Chess, S., & Thomas, A. (1981). 『子供の気質と心理的発達』(林雅次, 監訳). 東京: 星和書店. (Chess, S., & Thomas, A. (1980). *The dynamics of psychological development*. Brunner/Mazel, Publishers: New York.)
- 柏木恵子. (1988). 『幼児期における「自己」の発達』. 東京: 東京大学出版会.
- Parten, M., & Newman, S. M. (1943). Social behavior of preschool children. In R. G. Barker, J. S. Kounin, & H. F. Write (Eds.), *Child behavior and development*. New York: McGraw-Hill.
- 杉村伸一郎・桐山雅子. (1991). 「子どもの特性に応じた保育指導: Personal ATI Theory の実証的研究」, 『教育心理学研究』, 39, 31-39.
- 高濱裕子. (1993). 「幼児のプラン共有に保育者はどのようにかかわっているか」, 『発達心理学研究』, 4, 51-59.
- 高濱裕子. (2001). 『保育者としての成長プロセス: 幼児との関係を視点とした長期的・短期的発達』. 東京: 風間書房.
- 氏家達夫. (1996). 『親になるプロセス』. 東京: 金子書房.

(人間関係学部 人間関係学科)